

高値圏での推移を続ける原油価格動向とその背景

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
常務理事 首席研究員
小山 堅

2012 年、原油価格は高値圏での推移が続いている。年初から 11 月までの平均を見ると、WTI が 94.7 ドル、ブレントが 111.9 ドルとなっており、2011 年の年平均値（各々 95.1 ドル、110.9 ドル）とほぼ変わらない高値が続いているのである。いわば 2 年連続で 100 ドル原油の世界が持続している状況である。ちなみに筆者が 2011 年 12 月末に発表した 2012 年原油価格見通しでは、WTI100 ドル（±10 ドル）、ブレント 110 ドル（±10 ドル）を想定していたが、ほぼ想定通りの高値展開であるといって良い。

この高値圏で推移する原油価格の下、国際石油市場では何が起きてきたのだろうか。まず石油需要面では、需要鈍化の動きが徐々に進んできた。IEA の 11 月「月次石油市場報告」によると、世界の 2012 年石油需要は 8959 万 B/D となり、前年からの需要増加は 67 万 B/D (0.8%) の低い伸びに止まっている。

地域別に見ると、日米欧など先進国が景気低迷に苦しみ、かつ自動車燃費の着実な向上によって交通用燃料需要が低下する中、OECD の石油需要は対前年比で 50 万 B/D の減少となっている。これまで世界の石油需要増加を牽引してきた非 OECD では、前年比 117 万 B/D の需要増があり、OECD の需要減を補ったが、その増加テンポも鈍っている。やはり、中国を中心とするアジア新興国においても、経済成長が減速しており、高原油価格が続く中で石油需要の対前年増加量は、2010 年 144 万 B/D、2011 年 63 万 B/D、2012 年 54 万 B/D と着実にペースを落としているのである。

IEA 自身、上記動向を踏まえ、年初（1 月）発表の見通しで 2012 年の世界の石油需要増を 108 万 B/D と予測していたところ、現在まで大きく下方修正してきた。これらの点を踏まえると、今後の世界の石油需要はまさに世界経済の動きと、特に中国を中心としたアジア及び中東等の新興国の需要動向如何にかかっているといって良いであろう。

一方、石油供給の面でも極めて興味深い変化が生じている。まず非 OPEC については、2012 年の生産量は対前年比 45 万 B/D 増の 5322 万 B/D になると IEA は予測している。しかし、その国別生産内訳を見ると、メキシコ・英国・ノルウェーなどの主要産油国を始め多くの非 OPEC 産油国での生産が減少している中、米国の生産が前年比 84 万 B/D の大幅増で 896 万 B/D に達する勢いを占めている。もちろん、カナダ、ロシアなど 2012 年に増産となった国もあるが、まさに米国の大増産が非 OPEC 生産拡大を支えている構造である。

いうまでもなく、この大増産の背景には、非在来型資源であるシェールオイル（タイトオイル）の急激な生産拡大がある。

「シェールガス革命」が続く中、シェールオイルの生産拡大にも同じ水平掘削と水圧破砕法の適用が功を奏し、ガス価格が著しく低下する状況下でむしろ米国上流部門では高価値圏が続く石油の生産拡大へのドライブが働いてきた。その下で、バッケンシェールを始め主要なシェールオイル生産地域での掘削活動が活況を呈し、米国全体の石油生産増大に大きく貢献するほどの急速な生産拡大をもたらしてきたのである。

当面、この米国でのシェールオイル増産の勢いは止まらない、と見る向きは多い。今後も米国の石油生産増加（と国内石油需要の低下）は世界の石油需給バランスを左右しうる重要な要因として、その動きを注視していく必要があろう。ただし、この米国増産の背景に原油高価格という一要因があることも認識することは重要である。原油高価格が増産投資の重要なインセンティブとなっていること、そしてシェールオイルを始めとする非在来型石油の生産コストが相当高いとされていること、そしてシェールオイルの（シェールガスも）場合、油井の減退率が大きいこと、これらの点を踏まえると、今後の増産テンポを見る上で、原油価格の変化の影響は見逃せないのでないのではないか。

他方、OPEC にとっては、全体としては原油価格が高水準を続け、かつ全体の生産量も 3100 万 B/D を上回る水準を続けるなど、石油収入確保の面では好調な状況が続いている。10 月の OPEC12 カ国の石油生産量は 3116 万 B/D となり、年初来 3100 万 B/D を超えた生産を続けている。もちろん、この間、米欧主導の経済制裁でイランの生産が大きく減少し、それをサウジアラビア、イラクなどの増産が補う形になっており、OPEC 内では国別生産状況に注目すべき変化が起きていることにも留意すべきである。

しかし、この全体としての高い生産水準は、12 カ国全体での生産上限 3000 万 B/D を大きく超過している。また、世界の石油需要、非 OPEC 生産、OPEC の NGL 生産から導き出される OPEC 原油への需要（Call on OPEC）が 2012 年はやはり 3000 万 B/D 程度と想定されるが、それをも大きく上回っている。その意味で、全体として 2012 年が進むについて、全体としての需給は緩和の方向に動いているのではないか。他方、OPEC にとっては、現状の高価格水準を維持したいというインセンティブがより強く働くようになりつつある。特に、中東湾岸産油国にとっては、「アラブの春」の影響下、国内安定のための社会支出増大の圧力が強まり、財政均衡のための原油価格水準は着実に切りあがっている、とも見られる。

この状況下、需給状況の変化を見つつ、原油価格の動きを注視し、需給調整など必要な市場対策を OPEC が実施していく可能性は高い。次回の OPEC 総会が 12 月 12 日に迫る中、今の段階では現状維持が最も望ましく、大きな政策変化などが示される可能性は低いものと思われるが、2013 年以降の市場の変化にどう対応していくか、OPEC の動きも大いに注目されよう。

以上